詩雑誌「学校」研究(二)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1989-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1540

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

詩雑誌「学校」研究（二）

杉浦　静

本稿は、前号（「大妻国文」第19号・1988・3）に引続いて「学校」第二号を紹介・検討するものである。

※

第二号は、昭和四（1929）年二月一日の発行である。編輯・北山癌蔵、印刷（騰写版）・草野心平、発行・横地正次郎。発行者の北山癌蔵は、草野心平の筆名。なお、三号も北山癌蔵の編輯。この第二号から雑誌の発行を手伝った伊藤信吉は、草野心平のこの筆名の由来を次のように解説している。

手もとにある『学校』をみると、その発行名義人や執筆者中に「北山癌蔵」というおかしなネームを見うける。これは草野心平の〈風土的ペンネーム〉だった。前橋地方での冬を過したことのある人ならば、この奇妙なペンネームの感じが了解できるだろう。北西の空から吹きつける烈風や、烈風に荒らされる空気や、はらわたまで凍ってしまうような寒さなど、上州の冬はまさに北山癌蔵である。そういう寒い地方の風土の特徴を、北山癌蔵は手づかみにしたのである。（『逆流の中の歌　詩的アナキズムの回想』昭和五二年一〇月　泰流社）

また、草野心平自身は、『わが青春の記』（昭和四十年六月　オリオン社）に「学校」時代の回想を書いているが、そこではこのペンネームについては「「学校」では私はたびたび「北山癌蔵」というペンネームをつかったが、そのペンネームを犬にやった。」と書くのみであった。

なお、「詩と詩論」第三冊（昭和四年三月七日発行）の「新しい雑誌」の欄に、春山行夫によって、「衣裳太陽」（上田保・上田敏雄・西脇順三郎・瀧口修三ら）、「椎の木」（百田宗治ら）、「リアン」（竹中久七ら）と並んで「「学校」　二月号　價不明／尾形・草野・黄・尾崎・伊藤・神谷／前橋市神明町五四　学校社」と紹介されている。第二号寄稿者では、三野混沌・竹内てるよ・芳本優子・横地正次郎の名が落ちている。当時の詩壇での知名度に従っての選択であろう。

巻頭に掲載されたのは、三野混沌の「或る品評会」である。

或る品評会

僕はシャツのボタンをろくにあはせないで
汗だくの颯とした風を懐に入れた
モナークかレーテストかワーレン、ニュウオレゴン
栄養のどんとあるものの出品くらべだ
ぼくはそれらの苗をまろめ
まるでフットボールか刈草のよせ玉のやうにしてもってゆく
愉快でたまらない

この詩は、後に『学校詩集』（昭和四年十二月）に再録されたが、

僕には享楽はない
過労と過労からくる消衰と飢と雞と一つに寝るよごれた床
トマトや胡瓜の花に狂ひ酔ふりばえやはなすひばちが
僕のめぐりに飛びめぐる、この緑深い畑
赤いトマト、青白い胡瓜を食ふ僕でない
僕等が奪はれる
同僚等と一つに雑談して
大よそ僕達のたくさんの者達の為に違ひない
みんなこの気分でやってきてゐる
世界へ僕はそれらの玉の集りは、あかるさや又しっかりしたお
　ちつきさをみたしもたらすと考へる
地平線の彼方にならぶ白雲みたやうにならべるのは
といって、諸君は僕が町へ走ってゐると想像してはいけない
ひろい野良の上なのだ

その際に次の一連が付加された。

僕と同じ僕の妻も、僕の子供も、僕の豚も
僕を見てゐる隣の兄弟等も
悲しい深い大きい影を落としてるのを見てぎくっとした
作るものと食ふものと判然と別れてゐる
僕は飽くまで作る　だが誰がこの食物を送り出すのか

三野混沌は、「銅鑼」以前からの草野心平との交流をもととして「学校」に参加した詩人である。「銅鑼」には第十号（昭和二・二）に土方定一によって「非歴史的その他」のなかで、「未刊詩集・開墾者」が紹介された後、十一号（昭和二・六）から同人に加えられ、十二・十三・十五・十六号に寄稿している。三野混沌は、「銅鑼」参加以前に既に、本名の吉野義也名で詩を書き、山村暮鳥が中心となって刊行した雑誌「苦悩者」（大正七・一〇～九・一、全一四冊）などに作品を寄せていた。その後、妻木泰治や、やはり後に「学校」の同人となった猪狩満直らとガリ版刷りの雑誌「播種者」（ハンシュ者・ハンシュシャ）を刊行（大正十一年～十三年・未確認）したが、このころ、草野心平と知りあっている。草野心平によれば、初めての出会いは次のようなものであった。

私が三野混沌をはじめて知ったのは一九二三年の夏で、当時はもう吉野義也ではなく、三野混沌だった。私が広州から二度めに帰ってきたときで、その時も私はガリ版で「月蝕と花火」という詩集をつくった。いまは三井の重役をしているイトコの織平の下宿先で、トウシャ版は猪狩満直がどこかから自転車につけて運んでくれた。自分にとっては暑中休暇を利用しての帰朝だったが、その時自分たちは平の裁縫女学校の畳敷きの広間で詩の講演会をひらいた。ビラを書いて電柱にはりつけたりして。三野、猪狩、中野勇雄、高瀬勝男、妻木泰治、私などが講師というわけだったが、ひらいてみると聴衆よりも講師の数の方が多かった。それではあんまり体裁が悪いので、寄宿していた女学生に頼んできてもらった。その時混沌は多分カンディンスキーの芸術の話をしたように思う。近眼の目玉をむきだしてドモリながら。／会が終った頃は私の生家に帰る汽車はなく、私は初めて混沌の家に泊ることになった。暗い夜道を四キロ程歩いて坂道を登っているとき私の下駄のハナオがきれた。混沌は自分の下駄を私にはかせ、彼ははだしになって歩いた。朝、雨戸をあけると前の梨畑に朝日がかがやいていた。

（「三野混沌の葬儀に列す」『歴程』〈三野混沌追悼号〉昭和四五・八）

三野混沌は、昭和二年三月に詩集『百姓』を、続いて『開墾者』を出版した。その際に、草野心平は、「先駆」に「詩

集『百姓』に就いて」という紹介を書き、また、土方定一は先述の「銅鑼」第十号（昭和二・二）において、「非歴史的その他」のなかで、「未刊詩集・開墾者」を紹介している。これらの紹介が三野混沌の〈中央詩壇〉への登場の最初と言うことになる。土方定一は「非歴史的その他」で「未刊詩集・開墾者」と題して六篇の詩を紹介したが、その一部は次のようなものであった。

この貧い書が
百姓や労働者によまれることを
非常にうれしく思ふ
おれもまた百姓で
開墾者だからだ

—三野混沌

●

播け　播け　種を
かなしみは土の中で深く横はる
死んだものは誰だ
まっくらな土の中で
白い芽と、白い根が発きだしてる

●

葉っぱの下にのこしてある

いい仕事をするんだ
ひとはなんで
それがどんなんだか知らねえことあっぺ
知らねえことあっぺよ
だが　貧しい財布からおれをたすけてくれてゐた
おれをひっ背負ってる
骨と皮ばかりの
それを知らねえで終ふんだ

草野心平の紹介は次のようなものであった。

三野混沌氏は百姓に生れた。そして現在も百姓をしてゐる。詩集「百姓」は土着の百姓によって生み出された詩集だ。山村暮鳥氏の詩集「梢の巣にて」を嘗つて読んだ事のある人は、その中の長詩「苦悩者」の中に、

天日燦として輝く吾等出て働かざる可からず

といふ三野混沌、当時の吉野義也の言葉が引用されてゐることを想ひ出すだらう。それは又私にとっても、長いあいだ私の心をはげましてくれる私の座右の銘の一つであった。

詩集『百姓』は福島県の土着の百姓の詩集だ。銀座くんだりをステッキ逍遙する文化住宅みたいな詩人共には、どうしたって出来っこのない、フシっこぶだらけの詩、盛り上がった肉体の詩だ。私はこの詩集を読み終って、空間を横につらぬく黒い鉄の如きものをを直感した。獰猛な直線、どもりどもり内潜するダムダム、大口をあいた無言の叫喚―。

俺達は混沌のうちに生れた

若い頸だ
喚発する
おれと
おまへだ

彼の如き「おまへ」への握手は、彼にとっては「おれ」と「おれ」が握手することにほかならないのだ。そして彼は生産者のだ。

彼のふしくれだった手は何を物語ってゐるか。

彼の強度の近眼は何を物語ってゐるか。

彼のどもりどもりの勢力の口は彼の背後の、彼の前面の、彼等の土地の何をものがたってゐるか。

花
煮て食ふべな
なんにもねえから
花煮て食ふんだよ
おてんとさまあっちいった

私は思ふ。あらゆる生理的なるものこそ真実である。あらゆる生理的なるものこそ正義である。あらゆる生理的なるものこそ力である。あらゆる生理的ならざるものに何があるか。生理的なるものの火事！

これらの紹介が如実に語るように、三野の詩集『百姓』『開墾者』は、ともに開墾に従事することの肉体的・生活的な苦闘と、直接土と闘って生産に従事することの生の実感を書いたものである。「学校」に寄せられた「或る品評会」もこれらの詩集の延長上にある詩であるが、直接の生産への従事が〈世界〉へ「あかるさや又しっかりしたおちつきさ」をもた

らすことにつながるという、向日的な実感が表面に出され、〈開墾〉のはらんだ、より社会的な経済的な現実は切り捨てられている。これが、後に『学校詩集』に収録されるに際して、一連増補され、生産の喜びと表裏一体になった、搾取と困窮の問題を告発する、より社会的な意識を明確にした詩へと変えられていった。[注1]

尾形亀之助は、大正十五年八月刊の第七号から「銅鑼」の同人になっている。大正十四年十一月に第一詩集『色ガラスの街』を刊行し、その記念に開かれた「色ガラスの街の会」（大正十四年十一月十一日）で草野心平を知ったことが「銅鑼」参加の契機となった。尾形が草野心平と知り合ってから「銅鑼」への参加までの間に時間があるのは、大正十五年一月から月刊の文芸雑誌「月曜」を刊行しその編集作業に従事したことに一因があると考えられる。「月曜」は第六号で廃刊を余儀なくされたようであるが、創刊後、夏に廃刊するまでの半年余りの時期に尾形の他の雑誌への作品の発表はほとんど見られないことから推測すると、「月曜」に精力のほとんどをつぎこんでいたようである。「銅鑼」の参加は、「月曜」廃刊の直後であり、ようやく詩を書くことができるようになったためであろう。尾形の「銅鑼」への寄稿は、第七号以降第十号（昭和二年二月刊）までである。この間は全号に詩を寄せている。最後に詩を寄せた第十号は、第二次「銅鑼」の最初の号であり、以後、雑誌におけるアナキズムの傾向が強まっている。この雑誌の性格の変化と尾形が詩を寄せることがなくなったことに相関関係があるかどうか、不分明ではあるが、ある女性への思慕がつのり、妻との間に不和が生じた大正十五年末以後も、詩人協会への反発を核にして新興詩人の糾合を図った〈全詩人連合〉の創立に情熱を傾けた昭和二年末以後も、他の雑誌への詩の発表は減少していないことや、詩を発表する雑誌の中にアナキズム色の強いものがほとんど含まれていないことが、相関関係があったことを推測させはするのである。[注2]

「学校」は、〈詩的アナキズム〉の傾向を持ちながらも、〈文学〉色をより強く出そうとした雑誌であったが、尾形亀之助は、草野心平のよびかけにこたえて、「五百七十九番地」を寄せた。

五百七十九番地

あけ方に見た馬の夢を思ひ出したり、雨戸のふし穴から入ってくる光りを見てゐたりして寝床の中で昼近くまでぼんやりしてゐると、早くから眼をさましてゐた子供は腹をすかしてしまってゐる。

今日の陽はどっちから出たんだ—床を出て小便にゆくといっちゃんもだといふ。そして、子供が勢のいい小便をするのを僕はうらやましく思ふのだ。

北側の雨戸は風が入るので締りっきりにしてゐる。南側もこの頃は半分しか開けない。床もたいがいは敷きっぱなしにしてすましてゐる。ご飯を一日に三度喰べる時間が何時もなくなってゐる。

隣では朝暗い中から起きる。僕の家は起きて三時間もすると夕方になる。

自分に子供がある。この嘘のやうな事実は何だ。家の中で一番よい部屋に机を置いて、ちょっとでもうるさいと子供をしかったりする。自分の仕事は、何時になればなるほどこんな立派な仕事をするにはそのくらひはあたりまいだといふことになるのだらう。私が手をついて子供にあやまれば、子供も泣くだらう。

炭をおこせば、すぐ飯はたける。朝ごはんは何処へ行ったのーと子供に言はれても、目の前に茶碗に盛られてある飯を見てゐれば、僕は少しもかなしくはない。

畳や座布団がきたないのは電灯がついたばかりなのだからだ。もう一つには洗はないからだ。

この詩に流れる無為の生活意識は、昭和四年五月に刊行された第二詩集『雨になる朝』よりも、翌五年八月に刊行されることになる第三詩集『障子のある家』につながるものであり、第二詩集の編集にかかっていたこの時期にはすでに詩意識に変化が生じていることをうかがわせる。

ところで、この詩の題材になっているのは昭和三年三月に妻に去られた後の、尾形亀之助と長女泉の、東京の世田谷上馬五百七十九番地での二人だけの生活である。秋元潔の『評伝　尾形亀之助』（昭和五四・四　冬樹社）は次のようにこの頃の尾形を描いているので紹介しておく。

妻に去られたのち、亀之助は世田谷山崎の家をたたみ、母親ひさが駒沢にみつけてくれた家に、長女泉さんと二人で暮らしていた。（中略）妻に去られ、亀之助は〝家庭〟と〝生活〟の歯止めをなくしてしまった。三歳の長男猟氏は仙台の実家に預けられたが、五歳の長女泉さんは亀之助のところにいた。彼が父親らしい感情を全くもたない人間

だったら、苦悩もなかったろう。彼には父親らしい感情があり、倫理感も責任感もあった。そして妻に去られた男の悲しい体面があった。当初、彼は自制して酒もひかえた。子供にはさびしい思いをさせたくないと思った。

草野心平は「無題」と題する詩を寄せている。

無題

風邪には風・赤城颪にむかってブンブンブランコを振って暖を
　とった。
清松の丁公も自転車をとめておれの隣のブランコにのっかるぢ
　やないか
人力車にのった花嫁がとほる
今夜彼女は新らしい男の肉をひっかくだらう
肉と肉は肉の火事だ
汽関車の如く長襦絆もビリビリにするその意気でゆけとおれは
　思った
裁判所で新聞記者に合ひ仕事は駄目なことを知った
牛乳配達の方も失敗であった
職業紹介所へいったらいつものやうな笑顔をしておれも苦が笑
　ひしてそして外は曇天の風であった
図書館は閉ってゐた
氷のはった広瀬川ではガ鳥がガゲガゲ鳴いてた
そこら中にみなぎってゐるもの
はぢ切れさうなもの
沈んでゐるもの

固いもの
んんとしたもの
そしておれは泪といふものはよろこびの同義語としてのみ存在
　権をもつと主張する男の一人であったことを想ひ起こした
雪の赤城は立派だと思った
まっすぐに行け
仲間がゐる
必ずゐる
よしそれが脳髄の不具からくる岐道であってもそれに対する自
　分と自分の中に住んでゐる動いてゐる社会的客観以外の客観
　に対してはヘドを以て応酬してもいいとおれは思った
風邪には風
痔にはブラン
胃には沢庵
あらゆる病共に対しては渦巻く熱烈で対陣するのだ
グングン歩るく（ママ）
腹の底から暖があがる
利根川につっぷして水を飲むドグドグ飲む
公園の土堤にあがる

広っぱにでる
郵便局にでる
喚呼堂の横を曲る
連雀町
堅町
曲りたい道をグングン曲る
風邪には風・ブンブン歩るく
南京豆も買ふし焼芋も買ふし外套もぬぐし
—イヤ、こんちは
—寒うござんすね、みしり越しのそばやの挨拶を背中にきいて
ガラッと玄関をあけて
掌で額の汗をぬぐって
それからやってくるものは放心ででもあらう
大晦日の晩に感じたあんな白いやうなものででもあらう
その他の何んででもあらう
そんなものを感じるのはおれにまかそう
おれの脳髄はどっちみちおれらしく考へるだらうし何んでもない
自転車に轢かれたおれの足に対しておれの脳髄は何んと言ったか
「足はおれぢゃない他人だおれは知らない」
仲間よ
時がきたら吾達は言って笑はふぢゃないか
「痛いのはおれのからだだおれは知らない」
障子の破れ目にビリビリふるへてるのは何だ
おれを裏切った裏切りとは何だ
そんなものにうづくおれとは何だ
何んだってそんなおれを誰が知ってる
君もおれも達者ぢゃないか
君もおれもおれのやうだし君のやうだし
そしてはぢきってる吾達ぢゃないか
心配するな
心配するなってはてめへの言葉だ
だがこうした事実はどうしたことだ
吾吾の鬼才宮沢賢治が重病だといふこと
坂本遼の「たんぽぽ」のおかんが死んだといふこと
そしておれの妻君様がおれの前で寝てゐるのは幻ではないといふこと
おれはバケツに手をつっこんで薄氷をかき廻して笑った
そんな事実も笑っていいことだとおれは思った
当りまへのことは笑ってもいいに違ひないのだ
そのことに対してどんな弁解をおれにしたか
くだらない心理状態は説明したってくだらない
おれは妻君様にひましゆを買いにゆかう
少し遠廻りして雪の浅間を遠望しよう
人間が一匹や二匹死んだって
例へばそれがおれであっても損失はおれにだけもどってくるそ
の程度の話ぢゃないか

「太陽はおれから見れば子供だ、のぼせ上った精神ぢゃないか（ママ）
浅間のやうなやつは古くから生きてゐて新らしく生きてゆくのだ
製糸工場の煙突から煙は煙突に垂直をなして南に流れてゐる
風呂屋の煙突からも煙は垂直をなしてぬんぬん流れてゐる
サンドバアグを思った
ひましゆを忘れてはいけない
酒を飲みたい　馬鹿！グングン歩いた
みんなに会ひたい　会はないがいい
ハガキを思ひきって二十枚買った
そして思った
みんなといふものは確適（ママ）な力だ
力を押し進めることが言訳けしなくってもいい堂々たる自分にもならう
こいつこそ間違ってゐない！
風邪には風・嬶にはひましゆを買って二週間の褐炭をドシャおろそう
全くだ　笑はせるな
ドシドシ行け　ガンガン行け
ガリギリ行け
家へかへったら先ずイの一番、コップに満々たる水をほすのだ

「無題」は、のちに謄写版刷りの詩集『明日は天気だ』（昭和六・九）に「風邪には風」と改題され、句点がつけられて収録された。その際に三八行目（「喚呼堂の横を曲る」の行）の下に、「（以下五十九行略ス）」と書かれて、以後「連雀町／堅町」の二行で終えられている。この略の経緯については後の箇所に「★ここで写す紙がなくなってしまった。」云々との説明があり、さらに『草野心平詩全景』（昭和四八・五）に再録の際には、「「風邪には風」の最後の方に「以下五十九行略ス」と書いたのは、鉄筆で書いてゐたその晩、原紙がそこでなくなってしまったもの。」との説明があらためてつけられた。さらに、『草野心平詩全景』収録の拾遺詩集『四十八年ジッグザッグの』には、多少の手入れをほどこされた上で、全文が収録されている。

この詩について、村上菊一郎は、「風邪を引いたら風に吹かれろ、痔が悪ければ安酒を飲め、胃が痛むなら消化の悪いたくあんをかじれと、力みかえったバーバリズムを生活信条として、詩人は悪戦苦闘している。」（『近代文学鑑賞講座第二十巻　三好達治　草野心平』昭和三四・二　角川書店）と評している。又、伊藤信吉は、この年代の草野心平に、「アナ

キズムそのものの精神につながるところがあり、そういう思想を原型にした逆流の精神や、生活意識が数多くの作品に行きわたっている。」としたうえで、この作品について「前橋市の地名・町名や、赤城山や利根川などの出てくるこの詩は、草野心平がこの土地に住んでいた時の作である。これに似たせきこんだ呼吸の詩は数篇あるが、私はこのせきこみ方に魅力を感じた。野性的といえばいえるだろうが、それだけでは言いつくせぬ肉声のようなものがある。体温がある。何ものかを押しこくってゆく意力がある。あるいはフォーヴの精神。わけのわからぬ熱量。骨ばっていて洗練されているリズムの刻み方。それは私の生活情操とまるで別のものであった。」(『逆流の中の歌　詩的アナキズムの回想』昭和五二・一〇泰流社)と当時の回想を交えつつ評している。又、佐々木順子は、『明日は天気だ』収録の「風邪には風」を例にあげながら、この時期の草野心平が、「サンドバアグの様にリベラルな社会意識を芸術的に高い詩作品に結晶化する」ことを目指しつつ、「蛙詩を越え、背後に抵抗の意識を秘めながら現実に対峙し、鋭い現実描写によってそれを示す作品を生み出す。」(『研究資料現代日本文学⑦詩』昭和五五・一一　明治書院)と評した。

これらの評価は、対象としたテクストが『明日は天気だ』所収のものに拠っているものがあるにせよ、この詩が、詩誌「学校」における、草野心平の「銅鑼」からの変貌を最も端的に示し、かつまた、この時期の代表作とする点で共通する。この詩が草野心平の「学校」における代表作であるか否かはしばらく置くとして、「銅鑼」時代の〈蛙詩〉やアナキズム詩からの変貌が明確に見てとれることは明らかであり、これらの評価を首肯しなければならないのだが、それと同時にこの詩には、宮沢賢治の〈心象スケッチ〉の方法や語彙が影を落とし、さらに語彙には「学校」一号の「血の話」に共通する高村光太郎の影響が見られることも指摘しておかねばならない。〈蛙詩〉やアナキズム的詩からの脱皮がはかられるに際して、いかに草野心平が周囲の様々な詩人の詩を養分としていったかが明瞭に表れているわけである。

竹内てるよは、「銅鑼」十六号(昭和三・六)、つまり終刊号となった号に「裏町の声」を発表しているが、草野心平と

の親交はそれよりしばらく前からのものである。草野心平が「学校」第六号（昭和四年七月）に書いた竹内てるよの詩集『叛く』の紹介のなかの人物紹介（「人に就いて」）には、「吐血したといふ次の日、私は始めて竹内てるよ君に会った。」と書いている。この時期は、次の回想『わが青春の記』（昭和四〇・六　オリオン社）によれば、昭和二年一月のことであった。

その前日のことだったが新しく同人になった木村てるよ（竹内てるよ）が喀血したと神谷暢からきいていたので、まず彼女を見舞ってから、東京をしばらく離れようと思った。（中略）幡ヶ谷あたりだった、竹内てるよの間借部屋はわかったが、彼女はいなかった。机の上には長唄でもあるらしい台本があり、その写しが並んでいた。当時彼女は一枚五厘位で、その筆耕をやっていたらしい。帰りの道でビッコをひきながらやってくる彼女に会った。（その頃からずっと彼女はひどいカリエスだった。）訳を話すと彼女は赤羽までおくるという。断ったがきかないので彼女の言葉に従った。赤羽駅に着いた私は、どこへ行く汽車でもいい、一番早く赤羽をたつ汽車に乗ることにした。するとそれは新潟行きだった。

草野心平は、竹内てるよが「銅鑼」の同人になった後に、初対面したと書いている訳だが、この回想に従えば、昭和二年一月以前に竹内てるよは「銅鑼」に加入したことになる。しかし、ここには記憶の錯綜があるようだ。木村（竹内）てるよが同人になったのは、「後記」に「木村てるよ、坂本七郎氏新たに同人となる。」と記されている昭和三年五月発行の第一号からだからである。この件については後の「銅鑼」復刻版のために書かれた「銅鑼に就いての私的回想」（昭和五三年三月）では、正確に記されている。それならば、どのような機縁で草野心平は木村（竹内てるよ）に会いに行ったのか。木村てるよが、多少とも名の知られている雑誌に詩を発表したのは、昭和二年九月号の「詩神」が最初であった。それ以前に草野心平と木村（竹内）てるよを結びつける可能性としては、神谷暢の存在しかない。「学校」が刊行されている時期を回想した伊藤信吉の文章（『逆流の中の歌』）によれば、「竹内てるよの闘病生活を助けて」、神谷暢が一諸に住んでいたということであるから、この二人はその数年前から親密であったと考えてもよいだろう。神谷暢が「銅鑼」同人になったの

は、昭和三年二月刊の第一三号からであるが、すでに、大正一五年に開催された〈銅鑼の会〉（第一回九月中旬、第二回十月中旬、第三回十二月中旬）に出席していることが確認される。神谷暢と草野心平の交流は竹内てるよ・草野心平以前からのものであった。とすれば神谷暢を媒介にして竹内てるよ・草野心平の交流が生れたと考えるのが最も自然であろう。

竹内てるよは、「詩神」に詩を発表した後、「銅鑼」の同人に迎えられ、その終刊後は、アナキズム文芸誌「黒色文芸」「黒色戦線」に創刊から参加し、そしてさらに、「学校」にも参加したのであった。

竹内てるよが寄せたのは「あぶれ」であった。

あぶれ

ちびったローセキを投げてはしばらくは遊んだ
誰かの捨てたしぼんだまりで又しばらくは遊んだ
つまらなくなって口笛をふいても
けふはいつものやうに上手、にならない
かじかんだ両手をふところに入れ
日暮の町に立ってゐると
世界中の子供らにもちゃんのあぶれはあるのかと思った
終日頭をかかへてころがってゐるちゃんのために
もしここにいくらかのお金があったならば
大好きなお馬の絵の本も入らない
上手に折った飛行機も入らない
まともに北風に吹かれてゐると
涙が目にいっぱいになってくる
小さいからだをつゝむ真っくら闇
素足にせまる地の底の寒気
もしも男の子でなかったら
とっくに大きい声で泣いたらう、そのさびしさをかみしめ
この世に二人っきりのちゃんのでっかい手も
打絶えてぎゅっと抱いてくれることのない
近頃の家の暗さと冷たさを思ひ
小さい頭脳のすべてをかけて
いくらかのお金をほしいと思った

この詩は、のちに草野心平の手によって謄写版印刷された詩集『叛く』（昭和四・五）に収録され、さらに後に、渓文

社から再刊された同詩集（昭和五・一）にも収録されている。[注3]

芳本優子は、「世界」という詩を寄せている。芳本は、この時期、「学校」の他、「矛盾」の第五号（昭和四・六）に「断想三篇」という作品を寄せているのみである。秋元潔の『評伝尾形亀之助』（昭五四・四　冬樹社）によれば、尾形亀之助と昭和三年末から共同生活を始めた尾形優（本名　好本綢）ということである。秋元潔は『評伝　尾形亀之助』（昭五四・四冬樹社）に、尾形と芳本優の同棲の始まりを次のように記した。

「昭和三年十二月、亀之助は芳本優（本名、好本綢）さんと一緒に暮らすようになった。（中略）／優さんを連れて来たのは草野心平氏だった。（森田進）／優さんは十八歳、「詩神」「学校」「わるい仲間（のち文芸ビルデング）」「桐の花」などに寄稿、詩集『酒場の扉』がある。」

世界

時々
世界は偉大である
悲しみの時
望遠鏡で眺めた時
食ふことを忘れた時
時々
世界は偉大である

黄瀛は「点火時の前」という詩を寄せている。

点火時の前

タバコの火と和蘭小皿をみつめてる
曇天の動かぬ窓の梢
空の一直線上に行く音は何だ！
あれはMG　彼自身を驚かす物すごい物音
灌木の小枝、馬場を走る一群の乗馬者を貫き
天地一ぱいドドドドッとひゞく重強音！
そのあいだに流れるやうな暖炉の呼吸があるから
左の頰に暖かい熱がくる
もう日暮だといふのにこの無言劇の心を動かしてゐる
私は雪もよいの空を考へてる
あの白い生きものがちら〳〵踊ってくることは我々の世ろこび

にちがひない？
あのちく〳〵来る針のやうな生きものめが
卍巴に、緋々と、或はすっぱりと天地をおひかぶせて…

ああ、タバコのけぶりばかりで「世界大戦争」を回想してしまった
もう灯のつく頃を心にない頁ばかりめくってゐる
午後一っぱいしきりなしに鳴ってたあのMGの音にも飽きがきて
息づまる寒さにまっ赤に赤くなった夜を待つ
このツンドラ帯の鈎のある風物に
いつもの工場がへりの人々の足音が引っかかる時
自分は裏門に立ってその人達の後ろ姿を見送らう！
雪もよひの空だ！
きつい寒さだ！
自分の世界の土手っ腹をけ破るドドドドッといふ重強音！
あゝ、いつから君と離れた

自分だけの祝盃を飲みほす時は何時だ？
張りきった透明な世界は今またはっきり破られた！
地上にぱっとMGの三角火が閃くのは君には見えまい？
この動かない者の動き、それすらも君には
暖炉のちょろ〳〵火が一条の煙となって空に昇るのも…
今はもう君に自分ははっきり見えまい？
自分の貌が君の心中にないのは勿論のこと
夕方近い君の世界にも、僕の考へてる世界にももうすぐ灯が入る
そして雪は恐らく今日も一つの風物として自分の愛望にすぎなかった！
一陣の風が欲しい！
往くものを忘れる風、未来への強風！
沈黙の静けさをあゝまたつんざくのはMGのすごい物音！
私は灯がぱっと明るくなるまで自分をみつめてゐる——

（心象スケッチ）

この詩は、後に詩集『瑞枝』（昭九・五）に収録されたが、その際には、数箇所にわたって漢字や仮名遣いなどに訂正が施された。この詩は、日没時、灯りがともる前の室内にいる〈私〉の意識の動きをスケッチするスタイルをとっている。それは末尾に記された「（心象スケッチ）」との付記に見られるように、詩人の自覚的に選択した方法にもとづくものである。周知の通り〈心象スケッチ〉は、宮沢賢治の『春と修羅』の詩法であり、あきらかに黄瀛は宮沢賢治の詩法を採り込んだのであった。黄瀛が『春と修羅』を初めて読んだのは、彼の「詩人としての交渉は雑誌「銅鑼」で彼と伍したが、も

っと古く云へば日本詩人で佐藤惣之助氏が「春と修羅」批評以前に私は知ってる。」（「南京より」初出『宮沢賢治追悼』昭和九年一月　次郎社）という回想に従えば大正十三年十二月以前ということになる。たしかに、〈心象スケッチ〉という呼称は、詩集『春と修羅』（大正十三年四月刊行）の序に使用されており、そこで宮沢賢治は自らの詩を「心象スケッチ」と呼んでいるので、そこから黄瀛は〈心象スケッチ〉という詩法に関心を抱いたとも考えられる。しかし、より直接的には、宮沢賢治が草野心平からの慫慂によって「銅鑼」に参加し、「心象スケッチ」と総題した詩を寄せたことに刺激されたものであると考えてもよいだろう。宮沢賢治が「銅鑼」に参加し詩を寄せたのは、「銅鑼」第四号・大正十四年九月刊からである。これ以降、第五・六・七・八・九・十・十二・十三号に寄稿し、そのうち、五・六・七号では〈心象スケッチ〉と総題を付している。すなわち、「銅鑼」の宮沢賢治は、大正十四年九月から十五年八月刊の「銅鑼」において〈心象スケッチ〉という総題を付しているわけである。黄瀛が、〈心象スケッチ〉と題したり付記した詩は、調査の限りでは、昭和二年（大正十五年の翌年）四月号の「文芸」から昭和四年六月刊の「詩と詩論」までの間に限られる。しかも、この期間に発表された詩のうちいくつかは後に詩集『瑞枝』（昭九・五）に収められているが、「心象スケッチ」と題されていたものを別にすれば、全て〈心象スケッチ〉の付記は削除されている。

尾崎喜八の「銅鑼」との交流は、同人ではなかったにもかかわらず、〈第二次〉「銅鑼」においてかなり密接であった。初めて「銅鑼」に寄稿したのが、第十二号（昭和二年九月刊）で「詩集『ウーロップ』から」と題したジュール・ロマンの詩の翻訳であり、以下第十四号（昭和三年三月刊）にマルセル・マルチネの詩「河、村落、丘陵」の翻訳を、第十五号（昭和三年五月刊）に同じM・マルチネの詩「千九百十八年十一月十一日月曜日」の翻訳を、第十六号（昭和三年六月刊）には、レオン・ウェルトの評論「ファン　ゴッホ」の翻訳を寄せた。これは、レオン・ウェルトの評論を除けば、いずれも、第一次世界大戦の悲惨とその終結の歓喜をモチーフにしたものであった。尾崎は、大正の後半から「詩聖」を中

心として、田園の自然とそこでの生活の感動をうたった詩を発表し、また、高村光太郎や武者小路実篤・千家元麿らとの交流の中で所謂人道的な思想傾向を示していたが、大正末から昭和初めにかけては、第一次大戦後のヨーロッパのヒューマニズムの動きに共感を示し、前記「銅鑼」のほかにも「バリケード」に積極的にデュアメルやマルチネ関係の、詩や書簡の翻訳を発表していった。

「学校」に寄せたのも、第一次大戦後出征していまだ帰還しない恋人を思う少女をうたった、ヘルマン・ヘッセの詩の翻訳であった。

少女が家にゐて歌ふ…
（一九一四年十二月）
ヘルマン・ヘッセ

お前白い雪よ、お前涼しい雪よ、
私の大切な人の、蒿色の髪の毛の中へ、
私の大切な人の、愛すべき手の上へ、
遠い土地でお前は降ってゐるのか。
お前白い雪よ、お前涼しい雪よ、
それではあの人も寒くはないのか。
云っておくれ、あの人は白い野原に横はってゐるのか、
それとも暗い森に横はってゐるのか。
お前白い雪よ、お前いつはりの雲よ、
私の大切な人を休ませて置いておくれ！
お前は何のためにあの人の髪の毛を蔽ふのか、
又何のためにあの人の眼を蔽ふのか。
お前いつはりの雪よ、お前白い雪よ、
あの人は決して死んではゐない。
多分捕へられて
水とパンとのそばに座ってゐるのだ。
多分間もなく帰って来て
戸の外へ立つことがきっと出来るのだ。
だから私は涙を拭かなくてはならない。
さもないとあの人を見ることが出来ないから。

神谷暢は、実際に工場での労働に従事しながら詩を書いていった詩人であり、後にはアナキスム系の詩集等を出版した出版社である渓文社を起こした。「銅鑼」には第十三号（昭和三年二月刊）から参加したが、それ以前にも「文芸」（大正

十二・六〜昭和六・五　文芸社）などに詩を発表している。

「学校」に寄せたのは、「火」である。

火

寒気が俺達をゆすぶる
大きく息をすると肺が痛む
頭からずぶぬれになることを避けるだけには充分なこの外套に
　くるまり
冷えきった身体をすりよせ
ぐっと全身に力を入れてゐると
真っ赤に焼けた鉄ん棒のやうな本気がこみ上げてくる
真正面からぶつかってくるものへの惨虐な抵抗がくる

俺達は互ひに俺達の顔をはっきりと見た
俺達は俺達の力をはっきりと知った
働くのも一緒に
考へるのも一緒に
俺達がみんな一体になるその俺達の日まで
俺達は血の現実を貫いてのみ生きる
俺達は闇と泥と寒さのうちから立つ。

氷雨のつぶてをじかに受けた君と俺との
一つの外套にくるまった二つの顔はびしょびしょになる
そして君と俺とは少しづゝ温ってくる身体をガッチリと抱きし
　めながら
みじめさのうちにゐる仲間
みじめさのうちから立ち上ってくる仲間
同じ血脈の俺達の友情でいっぱいになる。

誰が百万の人間を数々の嘘つきの祭壇にしたか
誰が貧因者を貧困のどん底にそのまま突きのめしておくのか
何故労働はますます生と死とのぎりぎりの決着にまで押やられ
　てきたか
けふの人間と人間との間に何があるか
そして何があるべきであるか
俺達は現実への凝視と探求とによってその原因にまで肉迫する
俺達の直情・熾烈な意志
俺達は俺達の手を休めない
俺達は俺達の手で自由を獲得する
俺達は俺達の手で束縛を切断する
そして君と俺　俺達みんなの結合へのまっしぐらを進まう。

昭和三年から四年にかけて神谷暢は、この「火」の他に、「火―俺自身への檄」（「詩神」昭和三・一）「火―一揆に加は

った彼の言葉」（「銅鑼」昭和三・二）「火―草野心平君に」（「銅鑼」昭和三・三）「火」（「学校」昭和四・三）の四篇の「火」という題の詩を発表している。これらはいずれも「俺は孤立ではなく、／互ひに理解し、相応ずる響きのうちに生きるために自らをさらす」（「火―俺自身への檄」）、「苦しみに堪へ、地球上の俺達、一致せる悲痛な決意の戦線に立った俺・嬶・そして餓鬼／俺達は俺達の行動を持ちつゞけることを誓ふ」（「火―一揆に加はった彼の言葉」）、「一人の人間が生きるために幾千人／いや幾百人の人間が殺されてゆくその激しい侮蔑を怒り／閉ぢられた火の爆烈する時を思ひ／君と俺、そして俺達がこゝにかうしてあるやうに／みんなが友達として兄弟として結び合はねばならないといふことに就いて考へる／このことの真実を生かすための行動を躊躇するな！」（「火―草野心平君に」）に見られるような、抑圧する現実への怒りと同志結合への燃えるような意志を激しい言葉でうたったものである。「火」以前の詩、たとえば「枯木」（文芸」昭和二・四）は次のような確かに構成されたものであった。

枯木

崖の上に、寥々と立った一本の枯木に
夕陽が照り!!
枯木はみなぎる渾身の力をこめて炎々と燃へてゐる。
その上は寂しいまでに深い静謐に冴へ渡った青空だ。

枯木はたゞ炎となり
そのまる裸の枝々は稲妻のやうに空を引き裂いて
上へ、下へ、と鋭くはしってゐる。

枯木は悲痛な意志の姿である。
枯木は大きな寂寥の重みをグッと圧へて
結晶した涙のやうに燃へてゐるのだ。

枯木は陽に燃へ
枯木を抱く私も共々に陽に燃へ
高い孤独に凛々と澄み渡り
こゝろが痛むほどの寂しさに燃えてゐるのだ。

このような詩が一連の「火」にいたると、アナーキズムの意識が表面化して類型的な表現になり、詩は平板になっている。たしかに「学校」によせられた「火」に至るとより具体的な現実を描こうとする意識も見られるようにはなる

のであるが、理論と形象の類型化という問題ははらまれたままであると言わねばならないだろう。

伊藤信吉は、第二号から参加した。草野心平との知遇を得たのは、横地正次郎を介してのことだった。この間の経緯については、伊藤信吉に次のような回想がある。

草野心平と横地正次郎と私との三人の結びつきだが、この土地にそだった横地正次郎はそのころまだ二十一、二歳のわかい詩人だった。私は草野心平が前橋へきたのと四、五日ちがいに上京していて、その年の年末に東京から逃げもどった。したがって『学校』の刊行を手伝うようになったのは第二号（一九二九・二）からで、この辺から数えると草野心平を知ったのは、一九二八年十二月末か翌年一月ころのあいだということになる。私がはじめて前橋市神明町（後に紅雲町に転居）の家へたずねていったときのことを、草野心平は「伊藤信吉がはじめてきたときには、冬で炬燵があったが、彼ははいるなり寒いといった。炭がなかったのでかたちだけの炬燵なのだった」（「前橋時代」）と書いている。火のないコタツならさむいのが当り前である。こんなふうにして私は草野心平を知った。」（『逆流の中の歌　詩的アナキズムの回想』昭和五十二年十月　泰流社）

伊藤信吉が始めて中央の詩の雑誌に登場したのは、大正十四年三月号の「日本詩人」。この号の「第二新人号当選作品より」[注4]の欄に「宵」が掲載された。これ以降「日本詩人」「近代風景」「詩神」「詩歌時代」などに詩を発表し、新進の詩人としての活動を始めていたが、その詩風は萩原朔太郎の「青猫」の影響を強く受けたものであった。その後昭和初期にはプロレタリア詩の一翼を担うことになるのであるが、そのような変化は、時代の大きな動きによるとともに、このようにして草野心平と出会い、「学校」へ参加したことによってもたらされたものであった。伊藤信吉は「四人」という詩を寄せた。

四人

四人は低く口笛を吹いた　　四人のための席はどこにもない
つめたい空だから遊び場へゆき

飢えた顔だから酒場を見たい
いたづらな憎しみはマッチほども役立たない
四人は人間のする病気をする
ふるえるはらわたを凍らせる
嫌なことは嫌らしい人間と話すことだ
四人の口笛をひねくれでない
四人の購ふものはやさしい遊だ

街裏から賍品[注5]市場まで腹立しくいって
取引は二言の言葉で終る
酔ったまやかし店の店裏に見る
四人の口笛は一言でもない
四人は飢えた顔をする
四人のための席はどこにもない

横地正次郎は、創刊号に続いて「骸炭と僕」を寄せている。題名の「骸炭」とは、コークスのことである。この詩は、研ぎ澄まされた意識を、貧しい日常的な生活に摩滅させずに把持し続けようとする志向がモチーフとなっている。

骸炭と僕

切手をはって手紙を出してから
塩辛い定食にありついた
二三片の肉と馬鈴薯が皿の中で泳いでゐた
僕は眠くなった夕暮が近づいたのに風はやまない

灯が点くのを待つ必要もない
忘られた記憶の皺に浮び出てくるまでだ
僕は意識の表層に透明なガラスをはらない
熱いまさつの後のけいれんのやうに萎縮するもの
今日は去る

注1　三野混沌のこの時期前後の思想に石川三四郎の影響が見られることや、三野混沌の『或る品評会』（昭和六年三月）の次の詩集『この主人は誰なのか解らない』（昭和七年八月・渓文社）にクロポトキンの相互扶助論に共感したテーマがみられることが、松永伍一『日本農民詩史　中巻（二）』（昭和四四年二月・法政大学出版局）に指摘がある。また、同書で、松永伍一は、「或る品評会」が「詩としての調べの高さに（略）三野混沌の素朴にして実直な歓喜の質をよく出している。」と評している。

注2　秋元潔の『評伝尾形亀之助』に、「昭和三年一年間、彼はほとんど詩作をせず、旧作の推敲についやした。」「『雨になる朝』の作品の発表時期は、大正十五年十月から昭和三年十二月までにわたっている。（略）昭和三年は一年間ほとんど詩作しなかったので、実際にこれを書いたのはおおむね大正十五年から昭和二年までの二年間である。」との記述があるが、この時期にも旧作の雑誌への発

表はあるわけであるから、本論の推測は成立つだろう。

注3　渓文社については、秋山清の『あるアナキズムの系譜―大正・昭和のアナキスト詩人たち』（昭和四八・六　冬樹社）所収の「きき がき『渓文社』」に、秋山清による渓文社の紹介と神谷暢からの聞書がある。

注4　この「第二新詩人号」とは、前年六月に新人の詩を募集した「新詩人号」に続くもので、大正十三年十二月締切の後、翌十四年二月の当選作発表号である。翌三月号には、前号に掲載し切れなかった、順位の低かった詩を載せている。この第二回の募集に応募し当選した詩人の中には、後に活躍したものが多数含まれている。たとえば、黄瀛は第一席（千家元麿選）であり、以下、原理充雄（佐藤惣之助選）・坂本遼（白鳥省吾選）・安西冬衛（福田正夫選）・坂本越郎（百田宗治選）・伊藤信吉・滝口武士などである。なお、選者は、生田春月・川路柳虹・佐藤惣之助・白鳥省吾・千家元麿・多田不二・富田砕花・萩原朔太郎・福田正夫・百田宗治であった。

注5　賍品とは盗品のこと。